POLE

第102号

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
2021.1.5

報告

第34回　　ポーランド国立民族合唱舞踊団

定例総会 & シロンスク Śląsk

Zespół Śląsk オンライン公演『Exodus/エクソドゥス』動画鑑賞会

札幌エルプラザ4F大研修室、2020年11月21日（土）

感染急拡大のなか、総会には会員 12 人、動画鑑賞会には約 30 人（うち札幌フォークダンスクラブ7人）が参加しました。

動画鑑賞会の第1部〈「シロンスク」より〉では、安藤厚本会会長、ズビグニェフ・チェルニャク・シロンスク舞踊団団長（動画）の挨拶、ラファウ・ジェプカ新事務局長によるスライドトーク「ポーランドの文化と社会」（動画）のあと、現代舞踊『エクソドゥス』と民族舞踊ワークショップを鑑賞しました。

第2部〈札幌より〉では、ラファウ・ジェプカ（動画）、村田譲、遠藤郁子（代読:熊谷敬子）、長屋のり子（同、舞踊:若松由紀枝）、霜田千代麿副会長のみなさんの感想や応援パフォーマンスが披露されました。

ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」オンライン公演
第２部『エクソドゥス』に応えて～スペシャルメッセージ～（感想）

一在外ポーランド人から　　ラファウ・ジェプカ

こんにちは、ジェプカ・ラファウです。

「シロンスク」によるスペクタクル“Exodus”を拝見して、小学校から踊りと劇を習っていた私にとっては、たいへん感動的なパフォーマンスでした。

しかし踊りも素晴らしかったけれど、表現されたストーリーにいちばん感動しました。“Exodus”という単語は、たくさんの人が「逃げる」という意味ですが、私が国を離れた理由は（私は札幌に 20 年超住んでいます）、「逃げる」というよりは、知らないことをもっと知りたいための旅でした。私の旅がこの踊りで表現されたと感じました。

母国を離れることは、どんな理由があっても、さまざまな辛さにつながっています。みなさん「スーツケース」のシーンを覚えていますか。ポーランド語には「スーツケースの上に座るような生活…」という表現があって、どんなに面白いことがあっても、世界に自分が住む場所がないということはたいへんなことです。「自分の住む場所」とは、物理的な意味でなく、人とのつながりを表しています。

いま実家から1万キロ離れていて、一緒に輪になって踊る人がいるか、いないかで、人生がだいぶ変わってきます。札幌に住むポーランド人は少ないですが、日本にいるポーランド人に会うと、よく「この国は私たちの住む国ではない」と聞きます。しかし、たくさんの日本人と知り合うことが「Exodus」を「生活」に変える道だと私は思っています。

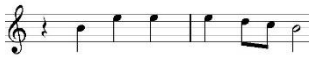
「シロンスク」の舞踊には、世界に散らばっているポーランド人の気持ちを、世界に知らせる力があると思います。ポーランドに住むポーランド人の数は4千万人近くですが、ポーランドの外に住むポーラ

ンド人は2千万人を超えています。世界のさまざまな国にいるポーランド人は、それぞれの場所で現地の人々とコミュニケーションしています。

札幌には、ポーランド文化協会という素晴らしい組織があって、私たちは恵まれていると思います。いろいろなイベントがあって、外国人に温かくしてくださっています。現地のみなさんとコミュニケーションを豊かにできて、心から感謝しています。

今日のスペクタクルには、なつかしい国の踊りがありました。「シロンスク」のみなさん、外国にいる私たちの心をすこし明るくしてくださって、ありがとうございました。　（Rafał Rzepka, ビデオメッセージ）

感動しました。　遠藤 郁子



「シロンスク」のオンライン公演を鑑賞し深い感銘を受けました。ポーランドの歴史と“Exodus”が重なり、私が 20 歳代の時に過ごしたポーランドでの足かけ5年間の日々、1965 年からの日々を思い出しておりました。

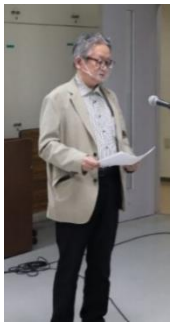
キラル氏の音楽に、同じポーランドの作曲家グレツキ氏の音楽が重なり（とてもポーランド的なメロディーの反復性）、振付のズプコフ氏が、グレツキ氏との作品を残された記述を読んで納得いたしました。

←このメロディーには昔聴いたポーランド民謡「マトゥラ・モヤ（私のお母さん）」が重なりました。そしてシベリアのポーランド孤児たちの姿に思いを馳せました。演奏、振付、音楽、照明、カメラワーク、すべてが高い完成度で圧倒され、反復されたメロディーに「ハレルヤ（神の賛美）」が響いた時には、目頭が熱くなっていました。

感動しました。Bravo!! Bravissimo!!!　（えんどう・いくこ、メッセージ）

＝写真＝上《第２回東京例会》2016.6.23, 下 ポーランド大統領から聖十字功労勲章受勲 2015.2.26

“Exodus” - 100 年前のシベリアからのポーランド孤児救出 村田 譲



箱に小麦粉なのか砂なのか、こぼし落とす女。閉じた蓋のうえに腰を掛け、そこへまた二人が座るが話もせずもたれあうように揺れている。あるいは床にトランクを置き枕にして眠る男という不安定なプロローグ。

タイトルの「エクソドゥス」は旧約聖書の出エジプト。だがモーセがいない。女が足元に置く箱が、モーセの十戒を収めたアーク（聖櫃）なのだろうか、それが失われたということか? 残った者たちの踊りの影は異様に大きく、倒れ起きあがる姿は天を求めるようだ。

「エクソドゥス」には、大勢の人の移動との意味もある。振付師ミハウ・ズプコフ氏は 1920 年のシベリアからポーランドの孤児を日本赤十字が救済した話から着想を得たという。

当時のポーランドでは実効支配するロシアへの反乱が頻発していた。政治犯とされての流刑、あるいは第一次大戦による流民となり 15 万から 20 万人がシベリアにいた。作品冒頭のトランクの男は捕まった政治犯、もたれ合う男女は流民の家族なのだろう。

さて、1917 年ロシア革命での内戦が飛び火しシベリアでは多数の凍死、病死、餓死者が出ていた。脱出を図った 600 人のポーランド人の婦女子を乗せた列車が燃料不足で立ち往生し、全員が凍死という悲惨な事件も起きる。

見かねたウラジオストク在住のポーランド人たちが「救済委員会」を立ち上げ、ロシア革命政府を警戒してシベリア出兵していたアメリカ、イギリス、フランス、イタリアの各国に働きかけるが、革命軍を止めようがないと分かり撤退する。その時点で駐留していたのは日本だけであり、代表は 1920（大正9）年外務省を訪れる。「罪のない子どもだけでも救ってほしい」との嘆願に、来日して 17 日後に日本政府は救出を決断する。

救援活動の中心は日本赤十字が担い、出兵中の陸軍が支援する。要請された月から翌年にかけ計5回で 375 名。2回目の要請の 1922 年は、日本もシベリア撤退が決定しており急を要しながら3度に分け 390 人をそれぞれ迎え入れた。年長で 16 歳、年少者は1歳。靴もない子が多く大半が栄養失調であった。

このことが報道されると、子ども好きの国民性なのか、寄付が続々と集まった。ポーランドへの帰国の船が用意されたが、親を失っていたときに優しく接してくれた看護師らと別れがたい子どもが続出し「アリガト」を繰り返しながら「君が代」を歌って別れを告げた。独立を回復していたポーランドへと帰国

した子どもらは、感謝を忘れないために「極東青年会」を設立し、日ポ友好に尽くしている。

今回の作品では、どの時点までをモチーフにしたのかは分からないが、後半場面ではハレルヤ唱が響き渡る。

日本赤十字の NEWS オンライン版 2020 年2月号には“恩返し”と題し、1995 年「阪神淡路大震災」の被災児童 60 人がポーランドに招待されたときの記事が掲載されている。まさに友好ということは手を指し伸ばすことから生まれるということであろう。

（むらた・じょう）

参照（いずれも web から）

・「Vol.10 ポーランド孤児救済」日本赤十字社、展示紹介コラム、2011/7/1

・「100 年前のシベリアからの救出劇! 765 人のポーランド孤児と日本人の奇跡の物語」辻明人、日本文化の入口マガジン和楽 web、2020/5/21

新刊紹介

『迷子の魂』 オルガ・トカルチュク(文)、ヨアンナ・コンセホ(絵)、小椋彩(訳)

岩波書店
2020.11

フィロソフィー本?

私がもし図書館司書なら、大型書店の店員なら、この本は哲学書のカテゴリーに分類するだろう。いや、アート表現のコーナーか。でも思春期のころにこそ触れてほしい。大人のための絵本コーナーも充実しているから、出来れば表紙飾りの棚が相応しいかと、あれこれ悩むだろう。

先ずは表紙をご覧頂きたい。インクの滲みボケる題字は時の流れが重なり、背表紙の擦れ具合のデザインも心憎い。

所々には、時の移りを醸し出すような、不用意に紛れこんだ手ちぎりの挟みのメモや、縁が朽ちかけた古写真の仕掛け。数枚透明シートの読みページと、絵のみの次ページへの透視の時空間。

とびとびのスタンプページの数字が、待つことを伝え、時を急がせない、母なる製作者の慈しみが奥に潜んで早る指を留めさせるのだ。

このご本一冊に、前半はペン先で葉脈一本も略さない具象力の高い俯瞰のモノトーン。後半は次第に増える差し色と懐かしい画剤の香り立つタッチのボリューム。

素朴で漂白しない昔ながらの“帳面”の方眼紙素材は、逆に贅を尽くすアート性を高め、その全ての構成のコンテンツが、魂のあり方にベクトルを向け、ノスタルジーの翳りあるセピア調の熟成で滲み染めている。

先ずはその初見で、現代の過剰世界から覚醒さながらの感動をお伝えしたいという衝動があった。

これでようやく本の内部に潜入出来る。筆者は 2018 年度ノーベル文学賞受賞のポーランド作家オルガ・トカルチュク、絵のヨアンナ・コンセホは出版（2017）の翌年、本書でボローニャ・ラガッツィ賞優秀賞を受賞、翻訳の東洋大助教でポーランド・ロシア文学専門の小椋彩(ひかる)さんは、昨年北大での公開講座にて、学識を超えたトカルチュクとの交流もレポートされていたので、嬉しさも増す。

｛魂が動くスピードは身体よりもずっと遅いのです。あるところに、忙しすぎて魂をなくしてしまった男がいた。男は医師の助言にしたがい、「迷子の魂」をじっと待つことにする。すると――**｝**

帯にはこう、あらすじが記されていて、私はすぐさまミヒャエル・エンデの名作「モモ」の時間どろぼうと盗まれた時間を人間に返した不思議な女の子モモを連想したが、本作は淡白なストーリーで他力を登場させない。仮想であるが現実味が色濃い。

アドバイザーは賢い老医師一人。主人公は自分の魂を置き忘れ、自分の名さえ忘れた、一昔前ならモーレツサラリーマンと言われた類いだろうか。現代なら同調時代という個の喪失・埋没の知らんぷり傍観社会への警告とも受け取れる。

前向き、自分探し、ポジティブ、アイデンティティへの希求は、より過剰な社会の加速で逆に排他を生み出しているのかもしれない。

主人公ヤンはひたすら待つのだ。数ページの沈黙は待つことに注がれている。そして迷子の魂は時を合わせて空洞の主の前に現れる。

待つとは。留まるとは。皮肉なことに、これはコロナウイルス蔓延で余儀なくされた私達自身の暮らしでもある。トカルチュクは予言者でもあったらしい。

自分とは、果てしない旅をしてきた DNA の産物である。この恵みを魂の有り様と重ねれば、もう感謝しかないはずなのに、私達は足りないものをまだ追いかけようとしていた。

そろそろ気づいて良いはずである。

魂と歩調を合わせよう。

自分を訪ね、自分に還る、魂そのものを迎える。

現象に一々反応して焦り、悪者を探すのはよそう。

魂は迷子となっても、必ずや主の元に着く。

自分を見失うとはよく言ったものだ。

待てば良いのだ。
まるで、おばあちゃんから受け継いだかのような装幀に再び五感を震わせる。
ありがとう! トカルチュクさん　（熊谷　敬子）

『樺太における日ソ戦争の終結～知取協定』

ニコライ・ヴィシネフスキー(著)、小山内道子(訳)、白木沢旭児(解説)

御茶の水書房
2020.8

隠蔽された停戦協定

樺太の戦前・戦後を多少なりとも知る者として、本書には大きな関心をもって目を通した。

特に、当時樺太ではソ連は敵国でなかったし、ソ連の宣戦布告は驚きをもって見られたことを思い起こす。まず、ソ連軍は日本が無条件降伏を受け入れた後も樺太の各地へ侵攻を続け、さらに8月22 日の現地第 88 師団とソ連軍の停戦協定（知取協定）締結後も、空爆を続けたことは不可解であった。島民の掲げる白旗も赤旗も完全に無視された。

当時、日ソ間には「日ソ中立条約(不可侵条約とも)」が締結されていたが、1946 年以降は不延長とする通告はあったものの、基本条約は期限内であるにもかかわらず反故にされた。

本書では、それらについて日ソの見解の相違が明らかになることを期待したが、上記の条約や協定書を反故にした経緯は全く触れられていない。当時のソ連の考え方は日本側には到底受け入れられないが、いかにもソ連=ロシア側のロジックである。

この件に関する日本側の記録としては、停戦協定の責任者であった第 88 師団の鈴木康生参謀長がその記録を戦後 42 年目に自著に残している。そこにはこの協定について日ソ間の締結書類が残されていることが克明に記録されている。しかし、この文書は日本側にはあるが、ソ連側の公文書には残されていないことが明らかになっただけだった。つまり知取協定はソ連側に無視されていたのである。

ハーグ陸戦条約などの国際法に照らしても、この協定破りは認められないものだ。停戦協定の存在が解明されれば、樺太も、北方四島もロシアが不法に強奪したことが明らかになり、陸戦条約の精神にも悖るものだろう。

本書の著者、サハリンの郷土史家ニコライ・ヴィシネフスキー氏は日本側の資料をみて、ロシア側の公文書に知取協定は残されていないことを、ロシア人として初めて明らかにした。これは日本側にとって大きな意味があるが、果たして今後ロシア側で検証されるのか、見通しは不透明である。

ロシア政府は現在に至るも「これらの領有は先の大戦の結果だ、その事実を日本は認めよ」と強固に主張しているが、樺太での日ソ戦は、多くは日本の無条件降伏後であり、また、この知取協定の締結後の一方的な攻撃の結果である。ソ連はこれらの不都合を隠蔽するために終戦は9月２日としているが、詭弁に過ぎないだろう。ソ連は少なくとも連合国側であり同一歩調をとるべきだった。また領土確定のサンフランシスコ条約にも出席しながら調印はしていないのだ。

ロシアが大戦の結果だと胸を張るのであれば、日本はロシアに対して、将来にわたって同じ論法でそっくりお返しできるというワイルドカードを握ったことになる。そういう意味で、本書は日本にとって大きな意義のある一文となろう。

また、二国間条約や協定など何時でも一方的に反故にできるということも教えてくれた。樺太は多くの島民の犠牲の上で本土防衛のための捨て石となったが、ソ連=ロシアという国の本当の姿を教えてくれたことは唯一の収穫であった。

樺太残留ポーランド人の運命

ソ連軍の侵攻の陰で、日本人島民の悲劇ばかり語られることが多いが、苦しんだのは決して日本人島民たちばかりではなく、ロシアや他の国々から残留や亡命していた人々のことも思い起こされる。戦前は、日本の官憲により彼らはひと括りにソ連のスパイと目をつけられたこともあった。

中でもサハリン島時代から「ワルシャワ村」と呼ばれた集落を作り、いつの日か母国へ帰る夢を抱いていたポーランド人たちがいた。彼らは 1925 年までにスタニスワフ・パテク初代駐日ポーランド特命全権公使から直接母国のパスポートを交付されたのであるが、戦間期から第二次世界大戦期の複雑な情勢から、帰国する機会を失っていた。彼らは日露戦争で日本軍により解放され残留希望を認められたのだが、四十年後に今度はあの悪夢のソ連に解放されるという数奇な運命をたどったのである。

ソ連軍が侵攻してきた時、彼らはソ連軍や民生局の通訳として徴用され、日本人のために働いた者もいた。それは樺太波蘭人会会長のアダム・ムロチコフスキ（ウッチ出身の教育者、北サハリンからの亡

命ポーランド人）だった。彼は、今度は日本人帰国者のための窓口となったのである。彼がソ連側にありながらも決して奢ることなく、明日は我が身として日本人に接していたことは忘れられない。

彼はその役目が終わるとソ連当局によって強制収容所に入れられ、尋問を受けることになった。それは北サハリンから日本へ亡命した経緯や、同胞人の会長となった経緯を調べられたのである。ロシア=ソ連の過酷な取り調べは何時もの常套手段であるが、教養ある彼は数カ月後に解放され同胞たちと共に無事帰国することができたのは幸いだった。

（尾形　芳秀）

停戦協定　ロシアの視座から追求

副題の地名をシリトルと読める人は、日本でもよほどのサハリン通である。サハリン生まれのロシア人作家が日本領南樺太で展開された「日ソ戦争（1945 年8月9日～23 日）」を描いたノンフィクション作品（原題は「シリトル協定」）。著者はソ連・ロシア情報のみならず、関連する日本語文献も駆使して、その全体像をロシアの視座から追求する。類書を欠くわれらにとっては頗（すこぶ）る読みごたえのある著述である。

日ソ両軍代表の鈴木康生大佐とミハイル・V・アリーモフ少将は8月 22 日、全島停戦協定を知取（現マカーロフ）で締結した。ところが著者によると、ロシア側には同協定に言及した記録が皆無で、自身も白木沢旭児（あさひこ）北大教授の 2008 年報告（訳書巻末の「白木沢解説」参照）に啓発されたのだそうだ。したがって、「シリトル協定」はヴィシネフスキー提唱の新語である。この新語は果たして、ロシアの学界や言論界で定着するのだろうか。

原書はモスクワの「ペロ」社が 17 年に上梓した 136 ページの上質紙冊子、マカーロフ市役所の刊行物（300 部発行）である。「序言」には本書がマカーロフ市長の「イニシアチブから始まった」とあり、また訳出されていない原書内表紙の「梗概」では、同市の観光行政に資するとも謳われている。日露両国の相互理解はこのようにして深められるのであろう（「訳者あとがき」参照）。

スターリンは 45 年、サハリン南部・北海道東部・千島列島を領土とする「アイヌ共和国」を構想したが、「同盟国のアメリカ人によって阻止された」（S・ゴルブノフ「アイヌたち」POLE 誌 100 号、北海道ポーランド文化協会、札幌）。留萌―釧路ラインを境界とするいわゆる北海道分割案のことであろうが、トルーマンはこれを退けたとされる。ひょっとすると赤軍は北海道侵攻を念頭に、知取での停戦協定を急いだのではあるまいか。

（井上　紘一）

（北海道新聞　朝刊 2020/10/18 掲載）

『モニカと、ポーランド語の小さな辞書』足達和子（著）

書肆アルス 2020.6

未だ進行中の「日記」

タイトルから、翻訳という作業を子ども視線から、と予想したが、全然違った（笑）。筆者が留学したおり、ポーランド日本語小辞典を編纂する羽目となり、そのときの下宿先で、かつての自分と重なる子ども、モニカとの出会いがあったのだ。

読み始めるとお国柄なのか時代なのか、疑問点が多かった。モニカの父がアメリカへ仕事を探しに出て失踪状態になる。母はその後を追いかける決意をする。ただその際、二歳にも満たない娘を近所の人に預けて出発するのだ。自分の父は国鉄に勤務し、宿舎という町内会のなかで私は小中高と過ごした。しかしここでの近所という繋がりには実感がわかなかった。結局、母親との連絡も途絶え、その近所の人は渡されていたメモに従って、筆者の下宿先である親戚までモニカを連れて来るのだ。どれだけポーランド人ってお人よしなんだろう？ というのが初めの印象だ。

さらに社会状況が安定しておらず、子ども服が売っていない。それで街を歩いている少し大きな子を連れている親子連れに「小さくなった服を譲ってくれ」という交渉をすることにも、はあ？ であった。ややしばらくしてポーランドが社会主義国家であったという理解に至るが、基本は「へー」でしかない。が、この二場面をピックアップするなら、社会主義という発想も考え直す価値がある気がしてはきた。

にしても最大の不思議は、いくらモニカが可哀そうな境遇だとして、会って数日にしかならない子を、二十代の独身の留学生でしかない筆者が日本に連れて帰ろうと決意することだ。それで自分の母親に連絡をとり、ポーランドの最高裁に勤めている同僚に国外への連れ出しが可能かを確かめる行動にでる。なるほど筆者は母子家庭という、実に男性至上主義の悲哀を背負っており、そうした人生観からの動機付けであるわけだ。それでもあまりに弾けた性格の持ち主で、どちらかというとちょっと呆れる。

ポーランドと社会主義、二十世紀がこれほど変化のある時代であることが克明に書かれている。そして結局モニカを、その親戚が引き取ることで、筆者は一年に一回会いに行く織姫・彦星さまとなるのであるが…。

この作品は、実は未だに進行中の「日記」だと思う。筆者自身が産むことのなかった、しかし事実上の娘であってもよいと認めたモニカ、幼年時代の記録のない子どもへと手渡すべき「アルバム」であるのだろう。（村田 譲）

ゆかりの旧都ペテルブルクで

初めてのB・ピウスツキ展　井上 紘一

サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）は、初のB・ピウスツキ企画展「ブロニスワフ・ピウスツキの諸世界～人類学民族学博物館蔵資料から」を開催しました（2019.12.6~2020.3.16; 7.14~27）。

同館はピョートル大帝の命で 1714 年に創設された「クンストカメラ」（珍品陳列室）に淵源し、2014 年には 300 年祭を挙行しました。クンストカメラは 1836 年の科学アカデミー定款により専門別7博物館とピョートル1世室に分割され、民族学博物館は 1844 年に誕生しました。本館に同居する人類学博物館と民族学博物館は 1878 年に合併して人類学民族学博物館（以下 MAE）を名乗り、帝都創建 200 周年の 1903 年以来ピョートル大帝の名を冠しています。ロシア革命後はソ連科学アカデミー民族学研究所として黄金期を迎えたものの、1934 年の科学アカデミー本部モスクワ移転以降、同研究所レニングラード支部の地位に甘んじていました。ソ連崩壊後は華麗な歴史を象徴する現称を名実ともに継承しています。MAE としての歴史は1世紀半足らずですが、今や五大陸の人類文化遺産 120 万件を収蔵する大博物館、1727 年ワシリエフスキー島のネヴァ河畔に建立された本館=上写真=を今も踏襲しています。

MAE のピウスツキ・コレクション

ブロニスワフ・ピウスツキ（1866~1918）は学業期の 2 年弱（1885.8~1887.5）をペテルブルクで過ごしたので、きっと MAE を訪ねる機会はあったでしょう。それはともかく、極東流刑中（1887.8~1905.12）には MAE の依嘱でアイヌとウイルタの民族資料収集に従事（1902.7~1905.6）、大部分の採集標本を MAE へ納めました。1903 年夏にはロシア地理協会が派遣したヴァツワフ・シェロシェフスキの北海道アイヌ調査に参加、その際の収集品も MAE に納入されています。ヴェロニカ・ベリャエヴァ=サチュク（現）MAE 上席研究員によると、ピウスツキ（とシェロシェフスキ）が 1902～05 年に収集した MAE 所蔵標本の総数は 1,396 点、内訳は（若干のウイルタ標本も含む）アイヌ標本 1,169 点、ニヴフ標本 79 点、その他（シェロシェフスキが満州や中国本土で採集したモンゴル人・中国人資料）148 点です［Beliaeva-Sachuk, 158-160 ﾍﾟｰｼﾞ］。つまりピウスツキたちはサハリンと北海道で採集した原住民標本 1,248 点を MAE へ納入、約 700 点がエンチウ（樺太アイヌ）、300 点は北海道アイヌにかかわり、エンチウ資料は世界で最大・最良のコレクションです。

MAE のピウスツキ・コレクションは一部が常設展示されていますが［図録3, 59 ﾍﾟｰｼﾞ］=右写真=、まとまった形での出展デビューは 1991 年、サハリン州郷土博物館がピウスツキ生誕 125 周年に開催した第2回ピウスツキ国際会議「B・O・ピルスツキーはサハリン諸民族の研究者」の特別展でした。MAE から 70 点、ウラヂヴォストクの沿海地方総合博物館から 4点を借用して、館蔵アイヌ標本も併せた 96 点のピウスツキ収集品を開陳しました［図録1］。次は 2013～14 年、小樽市総合博物館と九州国立博物館が MAE と組んで、「ロシアが見たアイヌ文化～ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより」と題する「アイヌ工芸品展」を小樽と福岡で開催しました。展示された MAE 蔵アイヌ資料 141 点（エンチウ 85、北海道アイヌ 42、千島アイヌ 14）のうち 104 点はピウスツキらの収集品（エンチウ 74、北海道アイヌ 30）でした［図録2］。私たちはピウスツキが自ら採集したアイヌ標本の実物を、日本で初めて瞥見する機会に恵まれました。

MAE におけるピウスツキ企画展

今回のピウスツキ企画展は通算3回目ですが、ペテルブルクの MAE での開催は、1世紀超の収蔵期間で初めての快挙です。企画展の開幕には、クンストカメラの 305 回誕生日に当たる 12 月6日がわざわざ選

ばれた由、クンストカメラ=MAE=ピウスツキの関係を想起する日になりました。この際はロシア帝国とその社会がピウスツキ畢生の仇敵だった事実を、しかと肝に銘ずべきでしょう。

残念ながら私は同展参観の機会を逸しましたが、以下に関連情報をまとめて報告します。企画と展示構築を担当したアンドレイ・ソコロフ MAE 研究員とヴェロニカさん=写真=は、MAE コレクション 1,248 点から精選した 53 点（エンチウ 38、北海道アイヌ 14、ニヴフ1）を、塔室2階回廊に設置された大小8個の「ガラス窓」内に陳列、随所でピウスツキ撮影の関連写真など 19 点も開陳しています。それぞれ〈手工芸〉〈日用品〉〈狩猟漁撈〉〈女の衣装〉〈男の衣装〉〈子供の世界〉〈信仰〉〈熊祭り〉と銘打たれた「窓」には5～10 点の関連標本が象徴的に配置され、例えば、〈子供の世界〉（男児用毛外套、玩具など5点）=写真①=、〈信仰〉（シャマンの手太鼓、イナウ、奉酒箆など 10 点）=写真②=、〈熊祭り〉（熊檻模型など6点）=写真③=は専らアイヌ標本で構成され、〈日用品〉の「窓」には「ニヴフの扇」=写真④壁面中央=も含まれています。展示の様子はヴェロニカさんがロシア語で解説する案内ビデオからも覗えます。

企画展開会式では MAE の新刊書『ブロニスワフ・ピウスツキの目を通してみたアイヌの世界～クンストカメラ・コレクション』[図録3]も披露されました。同書は 100 点の館蔵標本（エンチウ 65、北海道アイヌ 34、ニヴフ1）とピウスツキ撮影写真 37 点（エンチウ 35、ニヴフ2）を収録し、解題と本文の執筆者はやはりソコロフ研究員とヴェロニカさんです。実に不思議なことに、そこには「企画展」への言及が全くありません。ヴェロニカさんによると、アンドレイ・ゴロヴニョフ MAE 館長が企画展を着想したのは何と 2019 年9月で、全作業が僅か2カ月半で完遂されたそうです。図録用原稿はそれ以前に擱筆済みだったのでしょう。

今一つの注目点はポーランド政府系財団「ポーランド=ロシア対話・理解センター」が前付けに併記されていることです（巷間では同センターが刊行経費を支弁、発行部数 500 を MAE と折半と伝えられます）。

開会式に先立つ 12 月2日と3日、ワルシャワとクラクフでは図録の出版披露イベントが挙行され、ゴロヴニョフ館長とヴェロニカさんが列席しました。

ヴェロニカさんの私信は「ピウスツキの仕事がアイヌだけ、また学術のみに限定されず、サハリン住民の啓蒙活動や生活改善にもかかわったことを紹介したい」と記しています。今回の企画展と図録は確かにその一端の開示に成功しているとはいえ、いまだ道半ばと言わざるをえません。MAE 所蔵標本 1,396 点を駆使して「ピウスツキの諸世界」が全面開陳される日を鶴首して待ちたいと思います。

最新情報によると、MAE はコロナ禍の猖獗で閉館を強いられ（3.17~7.13）、企画展も中断されていましたが、7 月 14～27 日まで再開されました。

謝辞 本稿執筆に当たりヴェロニカ・ベリャエヴァ=サチュクさんから関連情報と写真を頂戴しました。この場をお借りして謝意を表します。

（いのうえ・こういち）

写真①〈子供の世界〉

②〈信仰〉

③〈熊祭り〉

④〈日用品〉

【参考文献】 Beliaeva-Sachuk, Veronika A., “In the Shade of the Two Eagles. Museum Collections of Polish Researchers and Travelers in Peter the Great Museum of Anthropology and Ethnography (Kunstkamera) of the RAS”, Etnografia, № 4: 151-171, St. Petersburg: MAE RAS, 2019

（図録1）樺太アイヌの民具，ヴラヂスラフ M.ラティシェフ，井上紘一共編，北海道出版企画センター，2002.2

（図録2）ロシアが見たアイヌ文化～ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより，アイヌ文化振興・研究推進機構編集，2013.10

（図録3）The World of the Ainu through the Eyes of Bronisław Piłsudski. Kunstkamera Collections（露波英3語併記）Authors: A. M. Sokolov, V. A. Belyaeva-Sachuk, St. Petersburg: MAE RAS, 2019

苦楽府（クラクフ）への想い

田村 浩志

ポーランド共和国の南部にクラクフという古都がある。1596年に首都がワルシャワに移る前は、この街がポーランド王国の都であった。この街は 1978年にユネスコの世界遺産に登録され、街中に中世の美しい建造物群やカトリックの古い教会が多数残っている。クラクフはドイツ軍の司令部が置かれたため戦禍を免れたのである。

その古都にポーランド科学アカデミーの一部門の動物系統分類学研究所がある。1979 年、事実上ソ連の覇権下にあったその研究所に、私は文部省（当時）から1年間の国費在外研究員として派遣された。私は、以前から論文の交換をしてきた旧知の研究仲間がいることもあり、コペルニクスやショパンの祖国で、文化の香り高いポーランドでの研究を申請し、認められた。キュリー夫人を敬愛している妻もポーランドならば一緒に行きたいと願ったため、小学校1年生と4年生の二人の娘を伴っての海外生活となった。勿論、家族の渡航費と生活費は自己負担だった。

娘たちは言葉も解らないまま、現地の小学校に「留学」を許可された。妻は独学していたロシア語が支配国の言語として忌避され、一方、私は加害国としてのドイツ語が忌避されて、当初は言葉の壁に苦労した。幸い、英語を解する友人たちに助けられながら、少しずつ現地の暮らしに溶け込むようになった。やがていち早く妻が買い物や子どもの学校との対応に慣れていったし、心配していた子どもたちの言葉の上達も著しく、3カ月を経た頃には私の買い物の際の介添えをしてくれるまでになった。研究所の人たちとは殆んど英語で意思疎通ができたので、私のポーランド語の進展が最も遅かった。

ポーランドの人たちには日本に興味を持つ人が多く、また人柄も控えめな人が多かったので、妻には何人かの親友ができたし、娘たちにも住んでいた集合住宅の近くに友人ができ、その子の家に自分たちだけで遊びに行くようになった。クラクフのスーパーの棚はほとんどいつも空だったけれど、友人たちがあちこちの商店の品揃え情報を提供してくれたので、肉も買えたし、時には長い行列に並べば、バナナやミカンなどの果物も手に入れることができた。

滞在中の 1980 年、バルト海に面した港町グダンスクの造船所でワレサ率いる自主管理労組「連帯」が誕生した際に、時のギェレク政権は弾圧を強めた。ワルシャワの日本大使館からは、有事の際の日本人会への連絡ネットワークの書面を受け取った。色々と緊張する場面もあったが、今思うと得難い体験となっている。

わたしたちが帰国した翌年、時のヤルゼルスキ政権はソ連を忖度して戒厳令を布告し、ポーランドの街中に戦車が行き来する物々しい状態となった。しかし、それが逆効果となり、カトリック教徒が人口の 90%以上の国民たちは教会を後ろ盾にして抵抗したため、1983 年7月に戒厳令は撤廃され、1989 年には政権が崩壊し、事実上の無血革命により自由主義の国家になった。過去に何度も近隣の国々に攻め込まれ蹂躙されて、地図から自国の名が消えても、いつか必ず取り戻したポーランドの人々の国を愛する不撓不屈の気概を私は尊敬している。

苦もあり、楽もあったポーランドでの生活は今も私たち家族の共通の話題源となっている。私たちの生活は「苦楽府」から始まったと言っても過言ではない。キュリー夫人は勿論のこと、すっかりポーランドとそこの人々に惚れ込んだ妻は帰国後、本格的にポーランド語を学び、翻訳者としての道を独自に切り開いた。娘たちはそれぞれアラフィフになったが、実家に戻ると、かつてのポーランド滞在が話題になることも多い。　（たむら・ひろし、茨城大学名誉教授、岩手県在住、奥様は翻訳家田村和子さん）

千歳高校放送局テレビ番組『ロウ管は語る』

私たち千歳高校放送局は、ブロニスワフ・ピウスツキを取り上げた5分のテレビ番組『ロウ管は語る』を制作しました。番組のテーマは「言語を残すことの大切さ」です。ピウスツキが残したロウ管音声の貴重さやアイヌ語研究への貢献を知り、言語・文化を残すことの大切さを伝える番組を制作したいと思いました。

番組は「高文連放送コンテスト」に提出し石狩地区大会で2位、全道大会では3位でしたが、後一歩で全国大会へは届きませんでした。ご期待に応えることができずとても悔しい気持ちでいっぱいです。取材にご協力くださったり、講演会で声をかけてくださったり、ピウスツキの勉強会を開いてくださったり、本当に沢山の方々に支えていただきました。取材を通して私自身も大きく成長することができたと感じています。ここまでこれたのも皆様の応援のおかげです。一年間沢山のご協力本当にありがとうございました。　（加賀谷彩心）

ポーランド&ニッポン歳時記 34

今年の 11 月

ポーランドで 11 月はお盆の季節ですが、11 日は独立記念日です。そして教会のカレンダーでは聖マルチンの日、ポズナンの中心にある聖マルチン通りのお祭りの日でもあります。この日、普段は雄牛の角の形をした芥子と胡桃の菓子パンを食べますが、今年は何故か蹄鉄型の芥子と胡桃のクルワッサンが売られています。

zimne powietrze　寒空の
z kubeczkiem grzańca w ręku　ホットワインや
wspominam zmarłych　死者想う

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

złoty liść klonu　楓の葉
oddechem wiatru gnany　風に駆られて
świąteczny spacer　散歩道

Piotr Wrzeciono, Warszawa
ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

初孫は秋の大気を吸ふて寝る
極月のキラキラ星はもう出たか
クリストよポインセチアの血の色よ

岩見沢市、霜田千代麿

第 34 回定例総会議案

(議長 尾形芳秀)

2020/11/21 札幌エルプラザ大研修室にて会員 12 名が出席、全議案が賛成多数で承認されました。

第 1 号議案 2020 年度(2019.9−2020.8)活動報告について(小笠原正明)

1.《第 34 回定例総会》、豊平館、2019 年 10 月 12 日(土)15:30～16:30 総会 1F 下の広間、17:30～19:30 懇親会 2F 広間(参加者)総会:会員 16 人、懇親会:日本人会員 18 人、一般7人、札幌フォークダンスクラブ7人、北海道 aibo の会9人、ポーランド人と家族 17 人

2.例会等主宰行事

(1)《第 92 回例会》講演会「二風谷アイヌ文化博物館特別展の見どころ」長田佳宏;新井藤子/「アマレヤ劇団とアイヌ女性たちの合同公演 2019 について」丸山博、札幌エルプラザ 4F 第3研修室、2019 年 11 月6日(水)18:30～21:30、参加者 24 人

(2)《二風谷アイヌ文化博物館特別展見学ツアー》札幌⇔二風谷、11 月 17 日(日)9:00～19:00、参加者8人

(3)《第 93 回例会》ポーランドサロン①ポーランドってどんな国?、ラファウ・ジェプカ、札幌エルプラザ 4F 大研修室 C、11 月 29 日(金)14:00～16:00、参加者 23 人

(4)《第 94 回例会》ポーランドサロン②ポーランド語でご挨拶、アグニェシュカ・ポヒワ、札幌エルプラザ4F 大研修室 A、2020 年4月6日(月)14:00～16:00、参加者 14 人

(5)《第 95 回例会》平取町立二風谷アイヌ文化博物館第 25 回特別展「1903 年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」移動展 in 札幌、会場:札幌エルプラザ、アンケート回答 60 枚超

①〈パネル展示〉7月 18 日(土)～26 日(日)2F 交流広場、入場(記帳)者約 100 人

②〈講演会〉7月 18 日 4F 研修室3「ブロニスワフ・ピウスツキってどんな人?」新井藤子「移動展 in 札幌の見どころ」長田佳宏、カムイユカラ(神謡)「カケスとカラス」披露:貝澤ユリ子(平取町二風谷アイヌ語教室)、参加者 15 人

③〈上映会&座談会〉7月 24 日(金)4F 大研修室 AB (1)ドキュメンタリー映画『ピウスツキ・ブロニスワフ～流刑囚、民族学者、英雄』2016 ヴァルデマル・チェホフスキ監督(2)座談会「ブロニスワフ・ピウスツキ人物伝～史実とフィクションが伝えること」司会:新井藤子、発言:井上紘一ほか、参加者約 40 人

3.会誌 POLE 発行 No.98(2019.9.5), No.99(2020.1.30), No.100(5.20)

4.運営委員会①2020.1.16②4.21(書面)③6.22④8.24

5.後援事業

(1)〈後援〉川染雅嗣ピアノリサイタル～バロックから現代までを弾く、共演:栃原享子、安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄アートスペース、2019年10月12日(土)17:00～

(2)〈後援〉講演と報告の集い「子どもの権利条約採択30周年によせて～日本とポーランド」札幌学院大学B館1階B101教室、11月14日(木)16:30～19:00 講演「コルチャックと子どもの権利オンブズマン」W・タイス、報告①「[コルチャック作]『マチウシ一世の世界』」M・シヴィツキ②「日本(北海道)の子どもの権利条例と公的第三者機関」松倉聡史(質疑と応答)コーディネーター:塚本智宏

(3)〈後援〉平取町立二風谷アイヌ文化博物館第25回特別展「1903 年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」同館伝承サロン、10 月1日(火)～12月3日(火)

[関連イベント]①10月15日、ふれあいセンターびらとり、シシリムカ文化大学講座「ピウスツキのロウ管～アイヌ語音声の再生と活用」伊福部達

②10月24日、同「1910年日英博覧会における沙流アイヌとピウスツキ」宮武公夫

③11 月 17 日、沙流川歴史館レクチャーホール、平取町立二風谷アイヌ文化博物館講演と映画のつどい「1903 年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」井上紘一&ドキュメンタリー映

2020年度 収支決算書（自2019年9月1日～至2020年8月31日）　（単位：円）

【収入の部】	予　算	決　算	備　考
会費	255,000	244,000	全額（3千円×96 人）の 84%
寄付金	40,000	70,000	
雑収入	10	2	貯金利子
小　計	295,010	314,002	
前期繰越金	293,113	293,113	ゆうちょ銀行
合　計	588,123	607,115	
【支出の部】			
事業費	100,000	64,640	33総会29,806、92例会二風谷特別展講演会17,917、93・94例会ポーランドサロン15,846、95例会二風谷移動展1,071
連絡費	100,000	79,834	郵送・はがき・切手
編集費	60,000	52,081	POLE98-100号ほか
会合費	25,000	10,274	運営委員会3回（持ち回り除く）
事務費	25,000	28,418	インクカートリッジ、封筒、ラベルシール、コピー、プリント代ほか
雑費	5,000	4,928	HP経費
予備費	273,123		
小　計	588,123	240,175	
次期繰越金	0	366,940	ゆうちょ銀行
合　計	588,123	607,115	
演奏部会基金	【収入の部】	【支出の部】	備　考
前期繰越金	71,767	0	
特別会計より繰入	0	0	
利息（北洋銀行）	0	0	
合　計	71,767	0	次年度へ繰越
特別会計			
1. 二風谷移動展			
移動展経費		88,371	チラシ4,601、講師謝礼等15,000、会場使用料12,890、展示パネル制作55,880
一般会計より補助	371		
助成金	88,000		ポーランド広報文化センターより

会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照合した結果、適正に処理されていることを確認しましたのでここに報告します。

2020　年　　月　　日　　監査委員

稲川和幸・嵩文彦両委員
署名捺印 2020/10/04

2020　年　　月　　日　　監査委員

画『Ainu｜ひと』2018 溝口尚美監督
(4)〈後援〉徳田貴子ピアノリサイタル～古典派からジャズ風クラシックまで、ザ・ルーテルホール、12 月 15 日(日)13:00～14:30
(5)〈後援〉第 71 回さっぽろ雪まつり大通7丁目 HBCポーランド広場(大雪像:ワジェンキ公園の水上宮殿とショパン像)2020 年2月4日(火)～11 日(火)
6.会員動向(2020 年度)入会5人、退会5人
(2020.9.1 現在)会員数 99 人
第２号議案 2020 年度収支決算報告および会計監査報告について(園部真幸・稲川和幸・嵩文彦)
別紙参照
第３号議案 2021 年度(2020.9−2021.8)役員等(案)について(安藤厚)　新任
(会則第6条に基づく役員)
会長:安藤厚
副会長:小笠原正明、霜田千代麿
運営委員:新井藤子、安藤むつみ、氏間多伊子、熊谷敬子、小林暁子、小林浩子、坂田朋優、佐々木保子、霜田英麿、園部真幸、塚本智宏、徳田貴子、中島洋、松山敏、三浦洋、ラファウ・ジェプカ、アグニェシュカ・ポヒワ
事務局長:ラファウ・ジェプカ
監査委員:稲川和幸、嵩文彦
(会則第 15 条に基づく事務局、会誌編集委員会)
事務局:(事務局長・渉外)ラファウ・ジェプカ、(副事務局長・会計)園部真幸、(催物)氏間多伊子、(同)熊谷敬子
会誌編集委員会:新井藤子、氏間多伊子、熊谷敬子、塚本智宏、松山敏
(会則第 16 条に基づく東京事務所)
(所長)霜田英麿、(副所長)熊倉ハリーナ
第４号議案 名誉会員の推挙について(安藤厚)
会則第 12 条に基づき、谷本美智子さんを名誉会員に推挙します。
第５号議案 2021 年度活動計画について(安藤厚)
1.《第 34 回定例総会》&ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」オンライン公演、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2020 年 11 月 21 日(土)
2.例会など
(1)ポーランドサロン
(2)ポーランド名画ビデオ鑑賞会
(3)第 10 回朗読会「午後のポエジア」
3.会誌 POLE 発行 No.101(2020.9.1), No.102(2021.1), No.103(2021.5)
4.オンライン広報の強化(Facebook, Twitter)
5.その他の後援・協力依頼には随時対応
第６号議案2021 年度予算(案)について(園部真幸)
別紙参照
第７号議案 その他 会長の任期・推薦方法、総会の定足数など、会の運営のあり方について見直しの提案があり、運営委員会において検討することとした。

2021年度 会計予算書（自2020年9月1日～至2021年8月31日）　（単位：円）　参考

【収入の部】	前年度決算	予　算	備　考	2019決算
会費	244,000	240,000	3千円×80人（納入率83%）	264,500
寄付金	70,000	50,000	2017年度実績程度（2018-20年度は特例）	68,000
雑収入	2	10	貯金利子	140,002
小　計	314,002	290,010		472,502
前年度繰越金	293,113	366,940		153,552
合　計	607,115	656,950		626,054
【支出の部】				
事業費	64,640	100,000	総会・懇親会4万、例会4回×1.5万	103,529
連絡費	79,834	100,000	ポーレ発送等（2.5万×3号）、その他DM2.5万	105,313
編集費	52,081	64,000	ポーレ印刷費等（1.6万×3号）、その他チラシ等1.6	73,995
会合費	10,274	20,000	運営委員会他（4回）	19,872
事務費	28,418	28,000	用紙、文具、コピー他（20年度実績程度）	24,832
雑費	4,928	5,000	HP経費（前年度実績程度）	5,400
予備費	0	339,950		0
小　計	240,175	656,950		332,941
次年度繰越金	366,940	0		293,113
合　計	607,115	656,950		626,054
演奏部会基金			備　考	
前期繰越金	71,767	71,767		34,697
特別会計より繰	0	0		37,070
利息（北洋銀行）	0	0		0
合　計	71,767	71,767		71,767

コロナ禍の「お盆」

ポーランドでは、まだまだコロナ禍が続いており、「第二波」が来ていると言われています。新学年度の最初の1カ月だけ通常授業ができたものの、10月からは再び遠隔教育、オンライン授業へ戻ってしまいました。先日、今年度の卒業試験 Matura の水準の変更が政府から発表されました（要するに、基準が下げられる――オンライン授業では例年の水準を維持することが困難なため）。

11 月1日と2日（諸聖人の祭日と死者の日）は毎年「お盆」の季節ですが、今年は人混みを作らないためにと2日間の墓地の閉鎖を政府は急遽決定しました。それを知ってか知らずか、墓参に来ても墓地内に入れなかった人たちが、墓地の入り口に花と蝋燭を供えていました=写真=。

また、店舗、役所、交通機関は、閉鎖もしくは利用者数制限がなされています。（津田 晃岐）

2021 年春のイベント

《第 96 回例会》ポーランドサロン③♫「シロンスク」舞踊団のワークショップ動画鑑賞とダンス体験（会場・日時未定、3月ころを検討中）

ご寄付ありがとうございます

（2020.9~12、1口千円）(7)霜田千代麿、松山敬子(2)栗原朋友子、小林暁子、佐藤純一、嵩文彦、徳田貴子、土橋芳美、長屋のり子、三上和子、山本伸一(1)安藤厚・むつみ・瞬、大賀美紀子、小川真生、亀岡延枝、北口久雄、カジミェシュ・コグト、佐々木保子、前田理絵、和田芳子

(敬称略、順不同)

2021 年度(2020.9~2021.8)会費納入のお願い

年会費（一般 3,000 円、学生 1,500 円）。
また、維持会費（1口千円）として、ご寄付も承ります。

【ゆうちょ銀行振替口座】記号 02740 5 番号 19735
【加入者名】北海道ポーランド文化協会
　または
［北洋銀行（本店営業部）普通預金口座］
［店番号］028［口座番号］0605084
［名義］ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ
　　北海道ポーランド文化協会　会長　安藤厚

※ご請求額は個別の納入お願い文をご覧ください。ゆうちょ振替用紙を同封します。
※遠方の方は、ご寄付 1,000 円/年で、会誌 POLE の定期贈呈も承ります。事務局にお問合せください。

POLE102　目　次

報告《第 34 回定例総会》&♫ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」Zespół Śląsk
　オンライン公演『Exodus/エクソドゥス』動画鑑賞会……1
第2部『エクソドゥス』に応えて～スペシャルメッセージ～（感想）
　一在外ポーランド人から（ラファウ・ジェプカ）……1
　感動しました。（遠藤郁子）……2
　“Exodus” - 100 年前のシベリアからのポーランド孤児救出（村田譲）……2
《新刊紹介》『迷子の魂』オルガ・トカルチュク文、ヨアンナ・コンセホ絵（熊谷敬子）……3
　『樺太における日ソ戦争の終結～知取協定』ニコライ・ヴィシネフスキー著（尾形芳秀、井上紘一）‥4
　『モニカと、ポーランド語の小さな辞書』足達和子著（村田譲）……5
ゆかりの旧都ペテルブルクで初めての B・ピウスツキ展（井上紘一）……6
苦楽府(クラクフ)への想い（田村浩志）……8
千歳高校放送局テレビ番組『ロウ管は語る』（加賀谷彩心）……8
ポーランド&ニッポン歳時記 34（津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿）……9
第 34 回定例総会議案・2020 年度収支決算書・2021 年度会計予算書……9
コロナ禍の「お盆」（津田晃岐）……12

発行　北海道ポーランド文化協会
〒060-0018 札幌市中央区北 18 条西 15 丁目 3-19　安藤方
電話・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com
東京事務所　〒107−0052 東京都港区赤坂 9-6-29-309 音響計画㈱ 霜田気付
電話 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058

ポーレ編集委員会
新井藤子／氏間多伊子
熊谷敬子／塚本智宏
松山敏

POLE No.102 (January 2021)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

34th Annual Meeting and video screening of the "Exodus" by Zespół “Śląsk” in Sapporo 1
In response to the "Exodus" ~ Special messages ~ Impressions of "Exodus"
From a Polish abroad (R. Rzepka) 1
Impressed! (I. Endo) 2
"Exodus" - rescue of Polish orphans from Siberia 100 years ago (J. Murata) 2
(New Books) “Zgubiona dusza” by Olga Tokarczuk (text), Joanna Concejo (illustration) (K. Kumagai) 3
“Siritorskoe soglashenie” by Nikolai Vishnevskii (Y. Ogata, K. Inoue) 4
“Monika and a small Japanese-Polish / Polish-Japanese dictionary” by Kazuko Adachi (J. Murata) 5
The first exhibition of B. Piłsudski at the Kunstkamera in St. Petersburg (K. Inoue) 6
Thoughts on Kraków (H. Tamura) 8
Chitose High School Broadcasting Station TV program "A Story of the Wax cylinders" 8
Haiku Yearbook: Poland & Japan 34 (M. Tsuda, P. Wrzeciono and Ch. Simoda) 9
Reports: 34th Annual Meeting of the Association 9
"Obon" in Poland (All Saints’ Day and All Souls’ Day) under the pandemic (T. Tsuda) 12